Faculty Development News Letter

BUKKYO UNIVERSITY

教授法開発室だより

vol.18
編集／教授法開発室
発行／佛教大学
発行日／2010年3月1日
〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL.075-491-2141　FAX.075-493-9019

URL http://www.bukkyo-u.ac.jp/

初年次からのピア・ラーニングとイー・ラーニング

教授法開発室員　達富　洋二（教育学科）

1．問題の所在

学生が自らの資質や能力を知るとともに、教職に対する意欲を維持しながらその達成に向けて学習計画を立て、それを展開していけるような教育を初年次から行いたいと考えている。そのために必要な力、とりわけ実際の学習段階において必要な力としては、批判的に読解する力、論理的に記述する力、必要な情報を編集する力、創造的に表現する力、学びを評価する力などのアカデミックスキルがあげられる。これらの力が十分でないために、大学での学習に困惑し、十分な学習成果をあげることができないという事実がある。そのことは、ながく抱いてきた教職に就くことへの将来設計をあきらめることにもなりかねない。夢を叶えることができる学士課程であるためにも、学生の力の育成について具体的な方策をもたなければならない。

2．教授法の内容と方法

2004年度より、

・目指す将来像を具体化させる力
・計画を立てる力
・日々の学びを支え合う仲間をつくる力

の育成を目的として、大学での授業にピア・ラーニング（既習上回生の参加を取り入れた編成）を取り入れた。また、2006年度からは、

・批判的に読解する力
・論理的に記述する力
・必要な情報を編集する力
・創造的に表現する力
・学びを評価する力

の育成を目的として、ピア・ラーニングの充実も図り、イー・ラーニングを取り入れていた。

教職に就くことを目標にしてきた入学生は、アカデミックスキルなどの力に不十分さはあるが、あこがれの職業としての教職にかかわる内容への関心は高く、教職にかかわる学習には積極的である。とりわけ教科教育法などについては、教師になることに近づいたような印象をもつこともあり学習意欲は旺盛である。そこで、専門教科及び教科教育法の授業において、その教科内容の理解に向かう中でアカデミックスキルを育成するとともに、学ぶ過程で育ちつつあるアカデミックスキルを活用して専門教科及び教科教育法の確かな理解を図ることができるような授業を行うこととした。

2．1　学習計画の提起

２単位の科目における学習時間である90時間を15週で行うには、1週あたり1.5時間の授業と4.5時間の予復習等を行うことになる。この4.5時間の学習方法を学生の自由にする

のではなく、シラバスに準拠した「学習のてびき」に沿って行うこととした。学生が学習を連続させていけるように以下のような準備を行った。

・予習のための課題を設定する。
・教材を公開する。
・予習の仕方と記述の方法を示す。
・参考文献を紹介する。
・復習の課題例を設定する。
・復習の教材を公開する。
・復習の仕方と記述の方法を示す。

これらの準備や個別指導にかかる教員負担を簡便化し、指導の効率化を図るために、イー・ラーニングにおける「学習の記録」「教材箱」「フォーラム」などの機能を活用した。

2．2　学習行為の提案

授業目標を達成させるには、学生自身が目的をもって学習計画を立て、学びを展開し、評価を行うことが必要であるが、学生が個人でそれを完結させることは容易ではない。ここにピア・ラーニングを取り入れることで、これらが有機的に結びつき学習効果を高めることができると考えた。

15回の授業の初回に5名程度のグループをつくり、それ以降はこのグループで活動を行った。グループには1人以上の上回生（既習）が含まれるようにした。その上回生は教員の代行を行うのではなく、あくまでも共同体の一員としての支援者である。信頼関係のあるグループとなるように編成時に時間を確保して自己紹介やグループ内での自身の役割、グループの学習目標などについての話し合いを行った。その後の平常の授業では、授業過程にアカデミックスキルの育成を図る時間を設定するとともに、随時ピア・ラーニングを取り入れた。

2．3　学習評価の提示

それぞれの学生が、授業のはじめには「本時の学習目標」を設定し、授業のおわりには「本時の学習評価」を行うようにした。また学習評価は自己評価だけではなくグループ内評価も行った。その記録はイー・ラーニング上に集積し、グラフ化して各自が確認できるようになっている。教員からの評価は記述所見で行い、イー・ラーニングやコミュニケーションノート（名称「64字のえとせとら」）を通じて各学生に返した。

2．4　学習機会の提供

授業の成果を確かめたり、実践知と関連づけたりするために、学校ボランティアやインターンシップ、京都市京都府両教育委員会との包括協定による小大連携学校実践プログラムなどで学ぶ機会をもった。また、実際に学外に行くことができない状況では、上回生の学校実践経験や教育実習体験を交流することで臨場感のある談話交流ができるようにした。

3．成果

本事例の特徴は、ピア・ラーニングのかたちによる対話型授業にイー・ラーニングによる遠隔型学習を取り入れたことである。ピア・ラーニングの充実によって授業は活性化することは間違いない。しかし、「おしゃべり」ではなく、目標達成に向けた「話し合い」を成立させるには、学習者一人一人が「話したいことがら」をもっておく必要がある。話すべき内容のないところに、充実した対話は成立しにくい。そこで遠隔型学習であるイー・ラーニングを取り入れた。自身の都合のよい時間や場所で予習ができ、それをフォーラムに書き込むことでやりとりができる。そして授業のいては複数の学習や及び教員と対話をするわけである。ここでの話し合いは間違いなく「本物」である。教職を目指す者の「本物」の話し合いは学習目標の達成に向けて協働的なものとなったと考えられる。

3．1　自学自習の質を高める／学習方法の提起（イー・ラーニング）

教員が15回の授業の全体計画を詳細に検討し、各回の授業で用いる教材を学生に公開する時間を考慮することによって、学生の関心や意欲は高まった。すべての教材が常にイー・ラーニング上に公開されているということも学生には便利だが、前回の授業に関連して適時性のある教材が公開されることや、この瞬間に手に入れたい教材が随時追加公開されることも学習意欲を促進したようである。また、必要に応じて検索の方法や検索先を紹介したり、オフィスアワーを案内したりすることも効果的であったと考えられる。

約70種の教材を準備したが、すべての教材において閲覧回数は期待を大きく超えるものであった。ダウンロードした資料を授業に持参するとともに、それと関連づけてノートを整理したり、必要な情報を他から検索して編集したりするなど自主的な学びにつながったと考えられる。

3．2　共同体として学びを支え合う／学習行為の提案（ピア・ラーニング）

グループの構成を固定することにより、コミュニケーションに連続性が生まれ、学びの共同体としての意識が強くなったようである。また、個々の発言がつながりをもち創造的な談話へと質的に深まったものになった。その結果、学生自身が目的をもって学習計画を立て、学びを展開し、評価を行っていくという学習過程の充実はおおむね達成されたと考えられる。このことは教員が感じることだけではなく、グループ内でも実感していた。

3．3　読解や記述の学習をてびきする／学習方法の提起（イー・ラーニング）

課題を提出すると届けられる教員からの所見は、アカデ

ミックスキルにかかわった具体的なものであるため、学生が自身の予習や復習を自己評価するための参考になったようである。授業時のエピソードを交えた所見は学生にとっては理解しやすいようで、今後の課題を具体化させることにつながったという声があった。また、各回の授業後に学習到達評価を行うことで、次回の学習計画を立てることができたと考えられる。

3．4　協働的学習をうながす／学習方法の提起（ピア・ラーニング＋イー・ラーニング）

イー・ラーニングによって24時間中かかわることができるため、授業が日常生活に入り込んでいるようである。時間別のアクセス状況は、夜間に多い傾向があるが、それほど偏ったものではなく、各自の学習習慣に応じたものになっていると考えられる。ピア・グループにおいて実際に対話することと、自宅でのフォーラムでやりとりとを併用する傾向が強く、対話型と遠隔型とが一体化したコミュニケーションであったようである。

3．5　学習意欲を喚起する／学習方法の提起（ピア・ラーニング＋イー・ラーニング）

随時、評価（教員やグループからの評価）を受けられるということは、本時の授業の復習としての手がかりとなるだけではなく、次時の授業における予習のてびきとなり、必要な情報を編集しようとする意識を高め、学習意欲を喚起することにつながったと考えられる。

3．6　学習の評価を集積する／学習評価の提示（イー・ラーニング）

本科目の学習目標と到達評価、及び毎時間の学習目標と到達評価を残し、グラフ化することにより、学びの総括を行うとともに次時からの学習計画を立てることができるようになり、主体的な学びをうながすことにつながったと考えられる。

3．7　学習の軌跡を可視化する／学習方法の提起（イー・ラーニング）

自分自身の学びのポートフォリオ化を図り、それを何度も見て振り返り整理することにより、学びを評価する力をはたらかせることができた。また、自身の学習の軌跡を客観的に見る習慣が定着したと考えられる。

3．8　学習実践と授業とを重ねる／学習機会の提供

学校ボランティアやインターンシップ、京都市京都府両教育委員会との包括協定による小大連携学校実践プログラムなどの機会を通して、実践的に学ぶ機会を提供することはできた。また、そのことを話題にしたコミュニケーションは臨場感に溢れたものとなり、教職に就くことへの期待を高めるとともに、自身の課題を見つめ直す機会にもなっていた。

4．課題

本授業におけるピア・ラーニングとイー・ラーニングの教育効果については、イー・ラーニングの「アンケート」による評価と、学生と担当教員間で行っているコミュニケーションノートによる評価によって判断し、おおむね良好としているが、ここに客観的なものはない。教育効果の測定の方法について検討していきたい。

また、学外での学校実践にふれる機会における評価についても同様で、その効果については詳細な検討ができていない。また、ピア・グループにおける上回生についてはライフヒストリーの記述を通して十分な検討を行っているが、それがグループ内で共有されているとは言えない。内容の充実と、効果の測定方法、記述とグループ内での共有の方法については今後の課題としたい。

謝辞

本実践事例で活用した「デジタルえんま帖」の運用を支援してくださったメディア教材開発・知財課に感謝致します。

註

本稿は2009年度京都地区私立大学教職課程研究連絡協議会研究大会（2010年2月19日／立命館大学）での口頭発表の予稿をもとに執筆したものである。

BUKKYO UNIVERSITY